２０２３年（令和５年）　８月２０日　日曜日

東奥日報　２０面　掲載

光星 胸張る8強

主将・中澤恒 部員151人引っ張る
みんなに感謝しきれない

19日、全国高校野球選手権の準々決勝で敗れた八戸学院光星。マネジャーを含め151人もの部員をまとめ上げた主将の中澤恒貴（3年）＝東京都出身＝は試合後「部員全員でつかんだ8強。みんなには感謝してもしきれない」と、りりしい表情で話した。

昨秋の県大会、初戦で弘前東に敗れた八学光星。敗戦後、ベンチ入りの選手は負けた原因が分からないまま葛藤を続けた。一方、ベンチ外の部員は初戦で負けたチームメートに対して不満を持ち、チーム内に不協和音が響いた。

「勝てるという油断があった。自分たちの力を過信しすぎていたのが目に見えていたのに、チームメートに言えなかった」と中澤恒。主将を志願したわけではなく、1年秋からベンチ入りしたこともあり「やらされている感じがあった」という。常に「自分はキャプテンに向いていない」ともがき、「（昨秋の初戦は）チームの士気が下がったまま試合に入った。敗戦の原因は全て自分にある」と、自らを責め続けた。

どうしたら部員全員が勝利に向かって一つにまとまるのか―。部内がちぐはぐなまま迎えた昨冬の基礎練習。ウエートトレーニングなど体づくりがメインの地道な練習ばかりで、真摯に取り組まない部員が多かった。

そんな中、「全力で練習に取り組む姿を見せることで、みんながついてきてくれるかなと思った」と、率先して基礎練習に励んだ。言葉よりも背中で見せた主将の姿を見て「徐々についてきてくれる選手が増えた」。最終的には、真剣に取り組まない選手の方が目立つようになった。

今春のシーズン前からは、3年生全員とベンチ入りした2年生によるミーティングも重視。試合後は必ず約1時間、その日の試合を振り返りながら反省点を挙げ、「勝つためにどうすべきか」などチームの方向性について腹を割って話し合った。「最初は自分が意見を言っても、10人ほどしかうなずいてくれなかったが、徐々に増えていくようになった」。春の県大会準優勝後は「チームがまとまったと感じた」。一丸で東北大会に臨むことができ、仙台育英を破って優勝した。

副主将の藤原天斗（3年）は「チームをまとめる仕事は全部（中澤）恒貴がやってくれた。本当に感謝しかない」と話し、仲井監督は「大所帯をまとめ上げることは大変だったと思うが、人間として成長した。よく頑張った」とたたえた。

高校生活最後の甲子園。中澤恒は「チームのみんなに支えられて、ここまでこられた。ありがとう」。感謝の言葉を口にし、最後まで涙を見せなかった。

（棟方好華）

「よく戦った」 留守部隊 八戸市民

準々決勝を戦い終えたナインをねぎらう生徒たち＝八戸市の八学光星

全国高校野球選手権準々決勝で八戸学院光星ナインが土浦日大（茨城）と対戦した19日、八戸市の八学光星高校や八戸ポータルミュージアムはっちでは、生徒や市民らがスクリーンに映し出されるナインの奮闘を見届けた。力負けし4強入りはならなかったが、堂々と戦い抜いた選手たちに感謝とねぎらいの拍手を送った。

同市湊高台にある八学光星の校舎では、運動部の生徒や教職員ら約40人が観戦。四回裏と五回裏の得点で1点差まで迫ると声援のボルテージは一気に上がったが、六回表に5点のビッグイニングを相手に許すと「あー…」と大きなため息が漏れた。それでも最後まで逆転を信じ、エールを送り続けた。

男子ソフトテニス部1年の坂本貴宏さんは「六回に5点も取られてしまったのはもったいなかった」と残念そう。一方で「4強に行けなかったことは悲しいことではない。8強まで勝ち進んだことにおめでとうと伝えたい」と健闘をたたえた。女子バスケットボール部1年の髙橋史江さんは「最後まで諦めずに戦っていた。8強おめでとう。来年また頑張ってほしい」と笑顔を見せた。

はっち2階の「シアター2」では、市民ら約10人が観戦。八戸高校野球部で引退したばかりという3年の巣山遼さんと佐藤純ノ介さんは、今年の春季県大会などで八学光星と対戦経験がある。

巣山さんは「（六回に）スクイズで失点した場面は、直前に不利なカウントになってしまい、相手の流れになったのがもったいなかった。でも最後までよく戦っていた」とねぎらった。

佐藤さんは「（対戦経験のある）岡本投手は直球も変化球も本当にすごい。2年生なので、八高の後輩たちには、来年頑張って光星に勝ってほしい」と話していた。

（白鳥遼、野上圭佑）

西尾 元球児の父の思い胸に
諦めない大切さ教わった

7回、西尾が放った右前打を喜ぶ昌隆さん

兵庫県出身の二塁手西尾太晴（3年）は、甲子園を目指し白球を追い続けた元高校球児の父昌隆さん(54)の思いを背負って試合に臨んだ。この日は5打数3安打と存在感を発揮。父が果たせなかった甲子園でのプレーを終えた西尾は、「お父さんがいなかったら野球をしていない。今まで支えてくれて本当にありがとう」と感謝の言葉を口にした。

昌隆さんは高校時代、名門・報徳学園で2年の秋に背番号をつかみ、三塁手としてプレーした。しかし、昌隆さんが3年の夏、同校野球部は学校事情により県大会出場を辞退。憧れだった甲子園出場への道が断たれた。

幼少期、夏になると必ず昌隆さんと甲子園球場に行った。2人で試合を観戦しながら「甲子園、出たかったな」と横でつぶやく父の姿が忘れられなかった。

「お父さんみたいに野球をやってみたい」。小学1年でクラブチームに入団。練習がない日は、昌隆さんの仕事終わりに近所の公園や野球場へ行き、キャッチボールやティーバッティングに励んだ。コロナ禍だった中学時代はチームの活動ができないことが多く、昌隆さんはティーバッティング用のネットを購入。自宅の車庫に取り付け、約200球を1時間かけて打ち込むなど、父子2人の特訓を続けた。

昌隆さんは打撃フォームのアドバイスをしながら、「続けることの大切さも伝えたい」と褒めて伸ばした。西尾は「お父さんに褒められるのが本当にうれしかった。もっと褒められたくて練習を続けた」と当時を振り返る。

「甲子園出場に一番近い」と八学光星に進学した西尾だが、「部内で行う紅白戦しか出番がなかった」。悔しさからウエートトレーニングや食事による体づくりに注力。入部時35キロしか挙げることができなかったベンチプレスは70キロを挙げられるようになり、体重も8キロ増。打撃に力強さが増し、昌隆さんと同様、2年秋から背番号をつかみ取った。

19日の準々決勝では土浦日大の投手陣から初回に中前、五回と七回は右前に安打を放った。憧れの聖地で戦う姿を見た昌隆さんは「自分の夢をかなえてくれて本当にありがとう」と笑顔。「補欠で悔しかった時期もあったと思うが、『努力は報われる』ことを財産にして生きてほしい」と話した。

試合を終え西尾は「お父さんの分もプレーできた」と誇らしげ。「諦めずに練習を続けることの大切さを教えてくれてありがとう」と、まめだらけになった手のひらを見つめ、言った。

（棟方好華）

東奥日報社提供

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです